<table>
<thead>
<tr>
<th>項目</th>
<th>内容</th>
</tr>
</thead>
<tbody>
<tr>
<td>題目</td>
<td>寄せては返す海：絵画ⅩⅠ 井川惺亮 館画の生還　中国での2つの個展（内蒙・武漢）</td>
</tr>
<tr>
<td>著者</td>
<td>井川惺亮</td>
</tr>
<tr>
<td>掲載誌名</td>
<td>長崎大学教育学部紀要 人文科学</td>
</tr>
<tr>
<td>期号</td>
<td>76</td>
</tr>
<tr>
<td>年</td>
<td>2010-03-01</td>
</tr>
<tr>
<td>URL</td>
<td><a href="http://hdl.handle.net/10069/23294">http://hdl.handle.net/10069/23294</a></td>
</tr>
<tr>
<td>摘要</td>
<td>本稿では、井川惺亮の絵画個展について紹介する。絵画の生還と、中国での2つの個展（内蒙・武漢）について述べる。</td>
</tr>
</tbody>
</table>

NAOSITE: Nagasaki University’s Academic Output SITE
寄せては返す海：絵画XI
井川惺亮/絵画の生還 2009
中国での2つの個展（内蒙古・武漢）

井川惺亮

大草原の生誕地
この9月、私の誕生の月に伴せて、しかもそのつき（月と言った）と言う音の語呂合わせをしたかのようにして、私が生まれた内蒙古（ネイモンクー）草原に向かった。内蒙古の赤峰（チーフォン）ターミナルからバスに乗り6時間も、延々と続く空気の透き通った視界の大地の広がりとその空間に圧倒されつつ、果てしない大草原を見続けた。この草原地帯で私が生まれたことに、その風景に心に染着していたのだと噛みしめた。（写真⑭⑬）
生まれた地名の錫林郭勒（シリンゴル）に到着した後、私が直接生まれた場所、盟貝子届（ベイズミョウ）に案内された。そこは両側にお寺の建物がコの字のように囲んだ広場だった。（写真㉓）私はその公舎で誕生したと聞いていたので、予期もしなかったラマ教（シンボリックなカラー：青、黄、赤、緑、白）のお寺町であったことに驚いた。オボの山が目印であることを旅立つ前に母から聞いていたので、「オボは？」と尋ねると、すると「このお寺群の中央に見える丘です。オボとは丘の意味ですよ。171段の階段があり、1と7と1を加えると9になるでしょう。中国では9はとてもいい、最高の意味を表す数です」と地元の人が教えてくれた。私が絵画の原色としてこれまでこだわってきた9色が、九州（長崎）に来たことと絡めていたが、9の響きが快かった。
この寺町を図面で語れば、中央にオボ山に登る緩やかな階段をシンメトリーに両脇を囲むようにお寺群が並んでいる。階段を登りながら、振り返ると、階段の坂につながって延々と一直線の道で町が出来ていることがわかる。丘には3つの塔が建てられていた。小高い丘だが360度見渡せる。町並みとその後方には草原が広がり、所々にゲルと牛や羊の群れが見えた。塔にはシンボリックな色布が巻きつけられ、その周りを3回廻り、その逆を3回廻りながら願い事を祈念すれば、願いがかなうとのことで、お参りした。（写真㉑）

故郷風景と原風景
私は幼年時代から10代後半まで瀬戸内海で、その後東京で20代終わりまで、30代半ばまで地中海、そして40代から25年間長崎で過ごしたから、殆ど海に囲まれた湿度の高い環境で育った。ここ蒙古草原は海などなく猛烈な乾燥地帯であった。案内してくれた院生、鳥（ウ）姉妹は、この地域から長崎大学院へ進学し2年半過ごし久しぶりに帰国をした。空気の乾燥により鼻血が出たとのこと。私も耳からほんの少し出血しつつあり。私の肉体が地球上に接した地は、すなわち生まれた土塚は、乾燥地帯であったことを、またこれらからの風土の違いの中に、命かけのようなものが宿っていたことを改めて思う。それは終戦の知らせを受けて命からがらで引揚げた現実、そしてその後を生きてきた過程がある。
修了後、日中国交時に新聞を見ていた母が泣きながら、「あんたもこうなっていたかもね。引き揚げの時は、あんたは瀕死の状態でのぅ・・・(涙々)こうして元気でおることは有難いことよ。もう奇跡と言う他ないわね。この子たち（記載写真の人たち）があまりにもかわいそうで・・・(涙々)」と手ぬぐいで何度も顔を拭いていた。母を見て私も泣いた。その国交少し前、中国民族歌舞団一行が東京芸大の奏楽堂で演劇を披露したのを目撃した。若者たちがセルリアンブルーのズボン（マネの笛を吹く少年のような幅広い）を履いて舞台を一斉に飛び回ってダンスをしていた。そのズボンの色に感動をした私は、早速青色のズボンを履いて上野公園を歩いた。その後中国ブームとなったが、私は職もなく途方に暮れ心身ともに低迷していた。突如フランス留学の話があり、それに邁進してしまった。

父から幼少の頃「お前が生まれた頃、蒙古草原に赤紫の朝焼けがたなびいていたよ」と話してくれた。「いつか蒙古草原へ行こう」と子ども心に思っていたが、前述のようにその思いは途絶えていった。10年前ハルビン師範大学の招待として黒龍江省美術館での個展を開催した時だった。高梁やトウモロコシ畑を車で見て大地の広さから、蒙古草原に一歩近づいた感じがした。

今回の旅は、私にとって、赤子の日にしたであろう、でも初めて意識して見る広大な草原を前にして、これまで原風景だと思い込んでいた瀬戸内海よりも原点があったのだと思いを新たにしたことだ。こうして思い込んでいた原風景、それより前の原風景に接したことで、まさしく風景を見る眼差しから絵画の体験をしていると実感した。

つい昨日まで30℃前後の気温が、眼前に広がる草原地帯では、変化し、0℃まで下がった。単なる草原という言葉で収まることが出来ないほどのものであり、空気がどこまでも透き通って、広大無辺の果てしない大草原だった。

私の風景の原色

子どもの頃、瀬戸内海の島全体が石灰岩で成り立ち、その周辺には朱色の土、雑草の緑、青い海、夕陽に反射した海面などの色があり、感動しながら描き、色そのもので充実するのを覚えた。大学卒業頃は、東京は高度成長に乗って高層化していくビル風景を、俯瞰図的なキューピズム風に描き、風景をモチーフにしたが、風景のイメージをむしろ否定する、あるいは排除するように描いていた。学生時は専ら「描き方でない、どう見ているかが大事」という教えが支配していたが、私はむしろその逆で「見る方でなく、どう描く（塗る）か」に関心を寄せていった。一方で、ゴッホの風景画にも関心を寄せていた。彼が浮世絵から日本の風土的表現を、例えば雨が降り注ぐ気象学的表現としての線や岩山の裾野に広がる地質学的表現としての点々状に興味をもち、それらのタッチを真似たのではと私は想像する。水墨画にも点、線、面があったにもかかわらず、何故木版画のインスピレーションがあったのか。本来日本の風景は水墨的なウエットなものであったが、版画表現となると、水墨画とは違い、線や面、あるいは点としての表現に適合し、西洋人が持っていた絵画の要素としての点、線、面と相まって、ややクールで記号的な表現となり、そこには西洋画になかったフラットな表現と、遠近などの関係性に線と色面など、新たな絵画の構築の糸口を見出したと私は思っていた。

マルセイユ留学の当初、地中海の輝くエメラルドの色を見て感動した。それが写真でな
く私が見た風景（海）の色（光）を水彩絵の具で描いて家族に伝えたかった。今見ると、これらの水性画は思い出としての価値が出てきたが、絵画のスタイルとしてはどうかと思う。しかし改めてこの水性画を前にして何か貴重なもの、そこに色（光）があることに不思議と見えってくるのは、歳のせいかもしれない。

いずれにせよ私はチューブから出た生の色を使い続けている。繰り返すが、この原点は瀬戸内海の風景の色だ。今から考えると石灰岩や土は絵の具に直結した物質である。私はこの風景から絵の具の生を見出し、それを繰り返し繰り返し使用してきたことに不思議と感情を覚えていることに。

銘打った「絵画の生還」

「赤峰学院から個展のタイトル名を尋ねられていますが、どうしますか」と鳥鳴鳴さんが何度か聞きに来た。昨暮れに長崎県美術館県民ギャラリーで「井川惺亮/マルセイから不時着」とサブタイトルをつけたのは、これまでの集大成としての個展だったからである。

生誕の地、内モンゴルでの個展もかも、意味合いがぐっと大きくなる。原稿データを最終的に送付する段階になって、大げさに「井川惺亮/絵画の生還」とした。これまで私自身の作品タイトルは生の絵の具そのものからきまって「Peinture」としてきたし、また制作する生の絵の具を簡単に薄ぺらく塗ってばかりだから、絵画の構造の問いかけをいつも持っていた。

他方現代美術では絵画と彫刻の境界が無くなり混沌としてしまい、「絵画は終わった」など言われて久しい。ここら辺りでもう一度絵画そのものを呼び戻そうと考え、「絵画の生還」とした。彼女が「生還とは何か」と聞く。「命がけで戻ってくる様で、例えば宇宙から地球に戻ってくることです」と言うと、電子辞書の中日辞典を引きながら「ちょっと重たい感じがしますね」との感想だった。こう言われると、重いかなと気にしながら、もっと軽やかなタイトルを探ったが、母の涙を思い出し、これに決断した。

出品作は最新作も出すが、メインとなるのはかつて制作した渦巻き作品の余剰作品群だ。「それが少々安易な選択ではないか」と思えば思うほど、またスケジュールが立て込み過ぎて、身体が思うように動かなくなり始めた。

中国行きスタートは9月1日だが、その前日までにはスーツケースの荷造りをせねばならない。動きが鈍い身体の気分転換に庭で採れたブルーベリーの実（2,700粒余り）をジャムにしようと台所に立つ。次第にぶつぶつと煮立つホーロー鍋に同調しながら、これまでのわだかまりや小言もふつふつと出てきた。

「明日出発と言うのに、中国での個展のイメージが未だに練れてない！渦巻き作品のまま進むのか」とヘラで混ぜながら、またつぶやく。「もうこれ以上の大がかりな作品の連作を新たに作るとなったら、作品収納庫がない限りは無理だ」と自己納得しながら、「何れにしても中国大陸に渡り、2回も個展だから飼牧民のように作品群を移動せねばならない。彼女が「何れにしても中国大陸に渡り、2回も個展だから飼牧民のように作品群を移動せねばならない。その最もたる絵画的知恵は、ジャパニーズの折り畳める作品群であると思う。それ以外はならないから、そこからセレクトすることだ」と言っ。それを持参し、生誕の地で持参できる作品発表をすればいいのではないか。また両親が終戦によって命がけの引揚げたことは、それこそが生還だが、こうして生誕地に舞い戻って、これまで日本で絵画活動してきた成果としての報告展こそがそのまま生還となる。そこで新たな絵画表現を獲得することにより、その生還の意味を問い直すこととも絵画の生還につながる」と独り言を言いつつ、煮込む泡の灰汁取りを繰り返した。
命がけで作品を胸に抱えて

福岡国際空港で、ダンボール作品の荷物チェックに引っかかった。これまで一度も経験したことなく、折角紐掛けまでしたのに開梱せねばならない。とても面倒だった。開梱したとたんすぐにOKサインが出た。再び梱包するが、紐かけなどがゆるくなり、おまけに汗をかいてしまった。コンテナズラの釜山空港を経て、天井が弧を描く線状で構築された新しい北京空港に着た。その建築からオリンピックを開催した偉業が醸し出され、さすがだと感心する。北京市内に出るため、作品荷物を預けるが、梱包の形状が大きく保管料も高くつく。北京で一泊しての赤峰行きとなっていたので、その夜は、北京オリンピック国立競技場「鳥の巣」へ烏さんの友人が案内してくれた。その建築は、どこから見ても見応えのある存在感を示し、また大きな龍のような線の構成によるモノメントとして見えた。

これらの建造物を見るにつけ、烏姉妹も別の国を旅しているようだと言うほど、北京はすっかり現代化を遂げたのだと思いつつ、翌日、北京国内線空港から飛行機で赤峰に向かう。その搭乗の荷物預かりチェックで、今度は「作品ダンボールが大き過ぎて国内飛行機の貨物室に入れない」と伝えられた。もう搭乗まで時間がないので、私の用意が足りないわけでの、その場で断腸の思いで梱包していたダンボールそのものを捨てることにした。飛行機に乗れば、乗務員から手荷物が大き過ぎると注意されやらで、ひたすら赤峰に無事到着して欲しいと祈り続けた。時折草原の風が吹き上げ、飛行機が揺れる中、機内サービスのお菓子で気分をほぐした。

赤峰学院へ（蒙古文字と馬頭琴）

赤峰空港では、学院の助教の張氏ら2人が出迎えてくれた。赤峰市は旧市街から新興都市化に向かう街で、赤峰学院周辺は新興住宅地のただ広い水平線の町となっていた。学院正門には太い紅いポールがあって、「赤峰学院」と縦書きされ、その横に鍵のような縦長の蒙古文字も書かれてあった。一段と生還という文字と重なり心が震えた。美術院前に着くと、その外壁に私の個展案内の大きなポスターが飾られていた。（写真⑤）いよいよと心が鳴った。それにしても明日の10時にはオープン式だ。それまでに作品飾り付けをしてはならない。学院内に入ると音楽院と思うほど練習曲が一斉に流れていて、すごい響き音だった。聞けば、「あの楽器は草原で奏でる馬頭琴ですよ！」と烏さんが教えてくれた。それですぐさまざまな、いい音に包まれ、私たちの歓迎のだろうと思った。しかしもう日が暮れようとしている。こんな切羽詰った時、親ばかの話は出すのははばかるが、でも私が今回気にしていた一つは、中国行きに息子の彩土も一緒になり、父親の仕事の手伝いとなると、それに対して彼がどんな気持ちでいるかであった。これまで通りの「やぜい、父親！」と言うのか。ところが彼が我々スタッフの一員として見事に溶け込んでいた様子にさせるのは、今流れる馬頭琴を奏でる学生の影が彼と同世代であったし、（写真③⑪）またその流れの曲が草原に馬が走るようなリズムから親しみ始めて、眼前の中国の風景
や人々、何よりも料理などが魅力だったからだろう。

中国第1会場、赤峰（天窓からの光）

赤峰学院の展示室を見た時、目に飛びこんできたのは貫禄ある古ぼけた存在感ある大き
な4つの可動用の衝立であり、これを仕舞う場所がどこにもない。ならば、どう展示で生
かすかだ。もう一つは天井を四角に切り抜かれ、そこから採光を入れていたことだ。

学生らの手伝いで、ライティング取り付けのパイプの格子状に積もった埃を脚立に登り
雑巾で、また床面も拭いてもらった。次にインスタレーションのプラン検討が始まった。
まず展示するインスタレーション作品（次に記してあるように①〜④、⑦まで。但し、○
番号は展示手順も同時に示す）の取り出しが始まった。 ①、インスタレーションの一作
目は、入口は入って、正面にV字状に2点を左右にこのライティングパイプから床にかけ
て設営する。（写真①⑮⑰⑳）②、このV字状作品の正面の壁に、アーチ状の窓をイメー
ジする作品を取り付ける。③、V字状右手作品からは右側壁面で次第に見える。 （写
真②⑧）④、V字状作品から左斜め奥の壁面衝立に人が通れる作品をインスタレーション
する。（写真⑧⑨）その間、⑤、紙箱作品群をV字状作品から右奥の壁面衝立に虫ビンで
取り付ける。⑥、④のコーナー壁面に切り絵群を虫ビンで止める。（写真⑳）⑦、の
左側作品を髪飾して天井に吊る作品をステンドグラスのようにインスタレーションする。
（写真④⑥）その後、⑧、輪っか作品群の取り付けをする。（写真⑳）そして⑨、形姉妹らに彼
女らの長崎での成果としての作品報告の資料を展示してもらう。最後に入口左壁面にプロ
フィール用として大きなポスターを掲示した。（写真⑱）

以上まとめると、天窓から採光を生かすこと。窓がないギャラリーなので、窓形態の作
品を設営すること。衝立を生かすこと。これらを念頭にインスタレーション作業に入り。
今回のインスタレーションは、内モンでは天窓の世界なので構築していく空間を作品で意
識させ、天井にある天窓の構造物へと目を向けさせることだ。（写真⑥）そこで、まずギャ
ラリー入口すぐにV状作品のインスタレーションにより、V状作品に一杯に受ける天窓から採
光で存在感が出る。（写真①）この明るさに対して、入口からV状作品を通らず、その左
側からも入場できる。その天井にはステンドグラスのようにして作品をテント状に吊ってい
るので、影（暗）となる。（写真⑥）V状作品の作品では左側と右側とでは、右側が入口
からやや離れているが、手前にやや出っ張りなので、V状の中心へと進みやすくしている。（写
真⑦）衝立活性化する空間として、例えば衝立を活用しミニアリに仕立てたことが
とだ。（写真⑨）学院全体は夜ともなれば全消灯となり、展示室のコンセントから大き
なライトを2台取り付け、やや暗めの中で展示となったが、どうにか2時過ぎまでに終え
た。

大輪花のリボンと澄んだ目の若者たち

10時に関係者が集まり、オープニングセレモニーが始まった。まず思わず目を奪ったの
は、モンゴル若者向けの衣裳をまとった美女揃いの学生らがテープカットにハサミ差し入
れ線として登場したことだ。更に驚いたのがテープには各カットをする人毎に40cmほど
の大輪の真っ赤な花リボンが並んでいたことだ。そのリボンをハサミ差し入れ線がそれぞ
れ支えていた。（写真⑳）その後、観客たちに作品解説をする段取りとなり、作品について語っ
ていると、ツーショットの写真撮影の依頼が次から次へとあり、またサインも大勢の学生からせがまれた。彼らの目がとても澄んでいて愛らしかった。
昼食となった。「中国ではいつもどの時もいつも美味しかったね。この時も美味しかったね」と料理時にカメラを向けていた家内は、今振り返りながら思い出して言う。
確かに‘うまかった’と思うが、このような歓迎と作品発表開催こそが、生還の境地を味わさせてもらい胸が一杯となった。
午後からは、講演会が設定されていた。会場に行くと、本学中部講堂のような広さがあり、学生たちで一杯となっていた。通訳は烏のお姉さんで液晶プロジェクター係は妹さんで、息子はビデオカメラ係にまわっていた。日本の学生のように平気で居眠りをするような学生はおらず、熱心に傾聴してくれた。内容は私の絵画展開に関し長崎におけるアートによる地域活性化など、わかりやすく説明した。質問も多くあった。
ダンサーの胡金霞（コ金霞）先生と軍訓教練の教官
今回の個展旅で大きな収穫の1つは、的確な批評ができる人と出会ったことだ。音楽学院のダンス専門の胡金霞教授だった。（写真②④）また映画のシーンを思わせるような光景に出会った軍訓教練の教官だった。
まずダンスの先生は、何度も会場に現れ、作品に堪能されたとのことで、拙作を次のように語ってくれた。「（略）井川作品から暖かいものを感じます。これまで溝山展観を見てきたが、このような空間を利用したアートを見るのは初めてです。芸術は表現ですが、簡単なもののは実は簡単ではなく、もっと深い意味を持っています。見た目には簡単ですが、人が加われば、もっと価値が出てきます。それは美術展だけでなく、撮影としても人たちは参加でき、井川作品しかできない背景が存在しています。井川作品は愛を感じさせてくれます。ダンスも同じです。優れたダンスは簡単な表現がなされるのですか、本当は簡単ではないのです。井川作品の前に出るとダンスがしたくなります。身体が動けば作品も変化します。作品は簡単なほど映えてきます。（略）」
次に教練の教官も、軍隊スタイルの制服と帽子を着用されて会場にやって来た。夕方私たちが校庭を去るとき、教練をしている運動場を横切った。教練の最中に拙作を見た学生が私たち一行を見つけて、教官の目を盗んで手で合図してくれた。それに気付いた他の学生たちも同調して手を振る。厳しく号令をかけて教練をしていた教呪も私たちを見つけて、最後には、教官と共にそのグループ全体が手を振り出したのではないか。声まで出して何か言ってる。烏さんら聞くと、「井川先生、ごきげんよう。いい旅立ちを！また来てください」と。私も家族も正門近くで、遠く木立に見え隠れするそのグループへ思い切り手を振った。
中国第2会場、武漢へ
武漢市（ウハン）にある中南民族（ジョンナンミンズウ）大学へは、錫林郭勒の後、北京に戻り、北京から飛行機に乗って2時間で到着した。機内から武漢を見下ろせば、水田や沼地や揚子江が流れていたのが見えた。内蒙古とは全く違った風景でやや長崎に近い植物を見かけたりした。気温も30℃前後に蒸し暑い。それでも私たちが着いた頃は少し気温が下がったと言っていました、しばらくしてから気温が上がり、じわりと汗が止まった。話を聞けば中国でも最も暑いところで有名な盆地だそうだ。太陽が顔を見せないほど空気が霧み、
自動車の車体や窓ガラスは土埃でひどいものだった。夕方になると月かと思うほど夕陽が灰色の空から真っ赤に見えていた。帰国時に北京の青空を見た時、久しぶりに太陽を見たという開放感を味わったほどだった。

ところで武漢空港から中南民族大学に到着すると、校舎外壁に大きな垂れ幕が3つほど吊られていて、そのうちの1つに、「日本芸術家 井川惺亮・絵画的生還展」を見つけてこれた豪いことになったと思わされた。真新しい138mもある壁面で、展示スペースが広すぎると思った。ここも明日の10時にオープニングセレモニー（写真⑹）が開催されるから展示が終わるだろうかと、我が心の風はムーアの彫刻のように穴からすーうすーうと抜けており、なるようにしかならないのだから。心配も一緒に飛ばすしかなくなった。赤峰学院では展示があまりにもうまくいき過ぎた。今度も同じようにいくかなあ。こうした心の風が吹いていると、いかないような予感もしてくる。幸い先ほどの風が吹っ飛んで、その音だけが通り過ぎてゆく。この焦りの反動で放心状態だ。奮い立たせて身体を動かせてみる。時間がないのに夕食の話が来た。初の歓迎として院長主催の食事だと言う。まず食べて元気を出そう！車に乗せられて町中のレストランへ向かった。折角のご好意だから、ここはリラックスして食しよう。これもうまい。誠にうまい！中国本番の料理はどこにおいても、出されたものは全て美味しいものだった。

展示の取り組み－1（蓁をもつかむ絵画作品）

ゆっくりした食事後、大学美術館に戻り、虫ピンが打てる場所を探ってみたら天井は歯が立ってないが、壁面は打てるので、これを認めてもらうタイミングを待とう。壁面の対処について前院長の鐘孺乾（チュウ ルーチャン）教授と事前確認をする。（写真⑳）もと釘が一切打てないものと聞かされていたから、その覚悟はしていたが、現場で見直す必要があるかもしれない。ここにはイデアが見つかるだろうと、何万両と言うことも見直すことにした。学生が作品を見つけるよう「壁面にセロハンテープを貼るぐらいは、いいでしょう」と出た。また「手伝う者がいるので、彼らに指示してください」と話しの最後あたりとなり、「困ったことがあれば、何なりと言ってください」と言われたので、私は壁面を触れながら「作品を虫ピンで止めたのですが、困っています」と恐る恐る聞いてみた。虫ピンを見られる「いいでしょう」ととなった。何でも私が初めて壁に穴を開ける人となるとのことだった。それだけにピンは一回打ちで失敗は許されない状況で対応することにした。こうして許可が出たことは本当にラッキーであり、前にも増して見直しが大きく見えてきた。今回も赤峰で経験した展示を生かすようにして、作品を壁から離して浮かす方法でのインスタレーションを考えた。それで天井の蛍光灯の採光部分の内側の隠れた手前が板状になっていたのを見つけ、ここにも虫ピンが打てることを確認した。（写真㉗）一層インスタレーションへの弾みがついた。

展示場全体図は、コの字に囲った展示スペースが4つある。1つの壁面の長さが正面7.8m、側面7.8m、残りのスペースがそれらを取り囲む壁面だ。総計138mというから、徹夜の展示作業をしても間に合わないと考えるが、と不安が横切る。こんな時はまず入口から会場全体を見渡すことだ。（写真⑳）入口からコの字の間の壁面までも全体広いスペースをとっている。デパートなどのコの字に店を構えた売り場スペースに似ていて、その店前の間取り
が広いといった感じ。入口から各々のコの字の囲い壁面を見ると一番目に留まる会場はどこか。入口から見てコの字の会場を左側から第1会場と振っていくと第2会場が中央（正面）となる。ここをポイントとする展示場とした。第3会場も右手空間が広がる展示空間の壁面となっているので、ポイントの2番目として考慮する。（写真⑤⑧⑨）こうして会場図面と実際の会場とを比較しながら、ジャバラ作品のセレクトを始めめる。この第2会場の正面壁面の中にインスタレーションする作品は、階段を上って入口から正面壁面だから、形態として階段状を予定していた。観客が登って来た身体的なことからくる形態よりも、この全体会場を支える作品が必要となる。それは面積的に広くゆったりとした山形カーを持った形態が引き立つと直感した。（写真③）

ところで壁面中央に作品を置くことはこれまで避けてきたが、このところ個展形式では、壁面中央を皆が重きを置いているように、私もそのようしていることも事実だ。その理由は、先述の通り個展だから他の発表者との関わりなどがないから、つまり展示場所にめぐる場所取り合いがないからだ。またインスタレーションの設営がし易くて、インスタレーションの表現が印象し易くより効果的な手法を生かせるなら、既成の壁に対するこれまでの一般的な壁の制度性を活用することにより、より一層のインスタレーションへの新たな展開が見えるだろう。否定していた壁面中央に躍り出ようとする場所取りは、裏の裏を突くと正面になるという逆転の発想だ。赤峰学院もこの中南民族大学でもどんどん壁面中央への活用へと進めた。

展示の取り組み－2（シンフォーニーの絵画）
メインとしたコの字展示場の第2会場の壁面中央は先述した面積の広い作品を壁面から離した天井の蛍光灯の所から吊り下げる、そこから垂直に吊らずに、床面でより手前と引っ張り斜めをなす展示とした。繰り返して言えば作品の高さが天井よりも長いので、垂直に垂らせば作品の方が余剰となり、そこで前に引っ張って調節を持った。これまでは、会場に合わせて作品作りをして来たが、今回は中国での2会場個展ということもあり会場の予想を立てられず、また会場図面の寸法の間違いもあり、それら誤差のある会場に出向いて、初めて持参した作品をその会場にあわせる製作をせざるを得ず、このような状況に陥った時、予期もしなかった偶然の出会いを見出す訓練は、長崎での自由の効かない、あるいは壁面のない展示空間への試みの経験によって鍛えられ、これが今回のようなにもならない状況に追いやりられた時に大いに役立ち生かされた。もっと言えばまるでこの場所に実にぴったりの作品を予め用意したかのような思いになったのだ。（写真⑬）
次のメインと考える第3会場の壁面中央は、赤峰で発表した作品を登場させた。（写真⑬）ここでも一度作品発表した作品を控えるというこれまでの方針を覆すことになった。何故そうするのか、それは会場ごとに移動するこのような展示場では、一会場、一会場が充実し、しかも見飽きをしない展示にしておくこと。しかも作品同士の絵画的なストーリ性のあるもの、あるいは作品と作品との関連性のある展示にせねばとも思う。そして展示場全体が一つの作品、シンフォーニーとして見せることも、会場作りの活性化だ。壁面中央に設営した窓のような作品は、輪か作品群と連動させる上で必要だ。悠久の歴史を持つこの武漢の人々に感動を与えることが、ともなおささず最大の目的だ。第4会場に行くと壁面中央は壁から天井までガラス張りの窓となり、外に向かって開かれている。ここにはステン
ドグラス風に作品を設営しよう。（写真⑨）第1会場の壁面中央には、第3会場と対となる窓作品を設営し、（写真⑩⑪）その左壁面には第2会場で考えていた階段式作品を設営した。（写真⑫⑬）これらは第3会場の輪っか作品群に対抗させている。後残り周辺や奥まった壁面は遠距離となっており、また壁面とはやや関係性が薄くなっているが力を抜かず強引に進めていく。（写真⑭⑭）鳥姊妹はもちろんのこと、今回はこの大学院生も含む作品運搬や作品展示するプロの方々が5人ほどの関係で、またメモや息子も（写真⑮）虫ピン打ちが慣れてきたため、作品吊りや壁面固定は比較的早く進んだ。徹夜を覚悟していたが、深夜の2時過ぎに展示完了しても、それがすごく早く終わったように感じた。

武漢人の文化性と現代性

会場に向かうと、既に2階に登る階段には学生の列ができて、そこをかき分けて入ると学生たちが会場一杯溢れていた。（写真⑯⑰⑱）こんな大勢が押しかけた光景は初めてだ。セレモニーセッションもその雰囲気に圧倒されてしまい、お礼の挨拶をせねばと思ったが、興奮で何をしゃべったか、声が掻き消えた感じ。（写真⑲）講演やトークも学生ちは熱心に聞いていた。（写真⑳㉑）ここ武漢は楚（曾侯乙墓）の時代など深くて長い歴史があり、湖北国立博物館に行けば、この遺跡物が目の当たりに見られるのだ。（写真⑳⑳）彼らはこの遺伝子を持ち続けていた。この中南民族大学は56の民族から構成されている。さすが国内版外国語大学という感じだ。それに反映されてか会場作りも横並び形式である。最初見た印象は横に広がる空間と真新しいギャラリーだ。現代性を持つかといえば、壁面は額縁作品をピクチャレールで吊ることのみだから、新しいとは言えないが、長い歴史を持つ地域とみれば、それが反映された新しさを持ったギャラリーということになる。

赤峰と武漢の2つの個展の経験から、ここ武漢でも当初予定していた渦巻き作品の実現は諦めて、ゼロからスタートさせたが、赤峰での経験から今の若者たちが反応した展示方法と、その展示とマッチした紙箱作品や輪っか作品をうまく演出させるように、即興的に生かしてみた。コの字会場の正面壁面（中央）には両サイドに小窓が開かれていて、開放感もあった。（写真㉑）この小窓から見える外の風景とインスタレーションした作品を対話させることにした。（写真㉒㉓㉔㉕）壁面から浮き出たインスタレーションは私には新たなテクニックとなったし、また紙箱作品にも学生たちは強い関心を示し、輪っか作品ではその作品を前にして記念撮影をしていた。いつの頃からか私は自作の前でパフォーマンスを試していたが、（写真㉖）現代美術に馴染みのない地方都市の若者たちが、いきなり作者の心を知って、私の作品の前で彼らはパフォーマンスをしながら、写メールやデジカメで記念撮影して作品と戯れていたのには驚いた。（写真㉗）まさに中国の若者によって体感できる私のアートが実証され、絵画の原点に立ち返ることとなり、絵画の生還へとつながった。
感謝
協力支援：内蒙・赤峰学院 教授/唐 家慶 薩 仁 助教 / 張 海龍 趙 金財 烏 力吉 卒 桂榮
武漢・中南民族大学 前院長 / 鐘 孝乾 院長 / 羅 彬 副院長 / 周 乙陶 教授 / 陳 斌
助教 / 胡 志雲 講師 / 徐 晶
展示、通訳、撮影：長崎大学院生 烏 嗚鳴 烏 嗚蕾 展示、撮影：井川道子 井川彩土